

産婦と助産師の面談によるバースレビューの効果

-Effects of birth review, mothers and midwives meeting-

西 4 階病棟 吉沢奈緒子 藤井恵美子 斉藤昭子 上條陽子

バースレビューから産婦の出産時のわだかまりを読み取ることができた。これらの産婦の思いを助産師が把握し、日々意識して産婦と関わることは、今後の助産ケアの充実につながると考える。また、助産師との面談により、産婦は辛かった出産体験を肯定的に捉えなおす機会を得て、それが育児へのプラスの動機付けという意味で産婦にとって有効であることが示唆された。

また、助産師も産婦との面談により、自分のケアを振り返ることができるなどのプラスの効果を実感していた。しかし、一方で、産婦の否定的感情への助産師の戸惑いなどもあり、今後検討していく必要がある。

キーワード：バースレビュー、面談、育児

I. はじめに

当院産科病棟における特徴は、他科及びNICUとの協力体制により、母児共に重症例の管理が可能となる点にある。そのため、重症な症例ほど出産に伴う妊産婦への精神的なストレスも多く、心理的ケアの充実が求められる。出産時の体験はその後の母親役割行動に深く関連し、母親が出産体験を肯定的に捉えることが、その後の母親行動をスムーズに移行する助けになるとの報告がある。そのため支援の1つに、産後出産時の状況を思い起こして振り返るバースレビューがある。さらに、助産師が産婦と共に出産時を振り返ることは、出産体験を肯定的に受け入れ、肯定的な自己概念を促すと言われている。当科でも数年前から用紙への記載方式のバースレビューを実施してきたが、有効活用ができていなかった。そこで、今年は重症例に対して、産婦の心理的なケアの充実を図る目的で、産後早期に助産師と出産体験を振り返る面談を導入した。本研究は、バースレビューの紙面から読み取れる産婦の思いと、面談による産婦及び助産師への効果を明らかにすることを目的とした。

II. 方法

1. これまで使用していたバースレビュー用紙を修正（平成22年7月）。

2. 平成 22 年 8 月～出産後の全産婦に対して新たなバースレビュー用紙配布開始。
3. 平成 22 年 8 月～分娩担当助産師との面談を導入。
 - 1) 面談対象：早期産、緊急帝王切開、遷延分娩など正常から逸脱した症例。
 - 2) 面談時期：産婦の体調に合わせて、産後 2～4 日目頃を目安に実施。
4. 平成 22 年 9 月に助産師へのアンケート実施。
5. 平成 22 年 10 月～12 月面談実施産婦へのアンケート調査を実施。
6. バースレビュー紙面から読み取れる産婦の思いと、産婦及び助産師へのアンケート内容を分類し質的に分析、考察した。

Ⅲ. 倫理的配慮

産婦及び助産師へのアンケート調査に関しては書面で研究趣旨を述べ、アンケートは無記名であり個人は特定されないこと、研究への協力は自由であり研究協力の有無によって不利益が生じないことを説明した。データは研究以外には使用しないことを説明文に記載した。産婦の面談は個室または面談室を使用して行った。また、本研究は看護研究倫理委員会の承認を得て実施した。

Ⅳ. 結果

1. 平成 22 年 8 月～12 月の分娩件数及び研究対象者数

分娩件数は 332 件。バースレビュー回収数は 271 名。このうち面談実施者数は 78 名、面談実施者へのアンケート配布数は 19 名、回収数 7 名であった。

2. バースレビュー用紙記入内容から見える分娩時における産婦のわだかまり

今回作成したバースレビュー用紙の内容には、分娩時の体験の感想の他に、分娩時のわだかまりの有無とその内容をあえて問うように構成した。それは、わだかまりがあるのであれば、それを産婦が自ら言葉に表出し、助産師に聴いてもらうという場を設け、わだかまりの意識転換や軽減につなげることを期待してのことである。その結果、産婦のわだかまりに関する記載内容は次の項目に大きく分類することができた。

1) 産婦自身の行動について

「呼吸法などしっかり練習しておけば、スムーズに陣痛を乗り越えられたかも」、「せっかく優しくジュースやおにぎりを食べたほうがいいですよと言われても、痛くて食べられなかったこと」、「血圧が高めで児の発育も悪く、自分の体調管理に問題がなかったか気になる」など自分の体調管理や分娩時の行動を振り返っての言葉が見受けられた。

2) バースプランとのずれ

「夫がお産に間に合わなかったこと」、「カンガルーケアできなかったこと」、「胎盤を見たかった」、「児が小児科入院となり、すぐに母児同室できず残念だった」など、産婦が思い描いていた理想とのずれに関する内容であった。

3) 緊急帝王切開への移行

「経膣分娩希望だったため、最後の最後で帝王切開に切り替わってしまい残念だった」など、胎児ジストレスや分娩停止などによる緊急での帝王切開への切り替わりに対しての内容であった。

4) 医師及び助産師からの説明不足

「カンガルーケアをするかと思っていたが、しなかった。なぜしないのか説明してほしいかった」、「急な帝王切開になったのはびっくりだったから、破水してから何時間という説明は最初にしてほしいかった」、「今自分がおかれている状態がわからないのが辛かったので、お産の進み具合やどんな感じになると進んできていると判断されるのかを教えてもらいたかった」など、説明不足を感じた内容であった。

5) 助産師及びその他医療者の関わりについて

「陣痛がひどくなったとき、夫がいなくて一人で耐えるのがすごく辛かったので、そんな時は助産師さんが少しいてくれればいいのにと考えた」、「少しでも処置に痛みを感じるなら、先に教えてほしいかった」、「一回目の電話で10分間隔だったので、すぐに受け入れてほしいかった」など、助産師や医師の対応に関する内容であった。

6) 環境について

「陣痛室に何人もいるので、眠れないし、申し訳ない気持ちになるので、長時間過ごすところなので快適さがほしい」といった、環境に関する内容であった。

7) 児に対して申し訳ないと思う気持ち

「最後は痛すぎて呼吸法をうまく行えず、赤ちゃんに苦しい思いをさせてしまった」、「羊水感染症になり、生まれたばかりの子に採血など苦しい思いをさせてしまっていることが申し訳なく感じた」など、児への負担を心配する気持ちに関する内容であった。

このように、産婦が感じる分娩時に残すわだかまりには様々な要因があることがわかった。

2. 面談導入による産婦への効果

アンケート調査は、バースレビューの面談を実施した産婦に実施した。実施期間は2010年11月～12月。19名配布中有効回答は7名。

1) 分娩担当助産師との面談を実施しての産婦の感想

面談を実施して7名中7名が良かったと回答した。その理由としては、「お産当日のことを色々話
ができた」、「口に出して話せることで自分の気持ちが整理できた」、「面談をしなかったらただ痛い
だけが頭に残り良いお産とは思えなかった」、など“自分の言葉でお産を語る機会が持てた”、“聴い
てもらえた”、“お産を前向きに捉えられた”といった内容が読み取れた。

2) 面談実施後、今回の出産体験の受けとめ方への変化の有無

5名は、前向きな気持ちに変化したと回答し、残りの2名は変化なしと回答した。

前向きな気持ちに変化した理由としては、「もう絶対嫌だと思っていたが、話をしてみて少し前向
きになれた」、「もう少し頑張れたのかもなど悔やまれる点もあったが、面談時よく頑張りましたね、
と声をかけてもらったので、気持ちに区切りがついた」、「振り返ってみると、痛みに耐えるのに精
一杯で、その時のことを思い出すのが辛い部分もあるが、お産に関わってくれた助産師さんは、そ
れを全てわかっていてくれるので、自信をもっていいんだと思えるようになった」、「お産のと
き、初めてのことで自分がしっかりできていたかがわからなかったけれど、呼吸法もしっかりでき
ていたと言ってもらえて安心した」など、“自信”、“安心感”、“気持ちの整理”を産婦は感じたこと
でお産を前向きに捉えることにつながっていたことが読み取れる。

一方、気持ちの変化はなかったと回答した理由としては、もともと自分で前向きに考えていたの
で、あまり変化は無かったと述べていた。

3) 分娩担当助産師との面談の必要性について

必要と回答したのは6名、残り1名は必要としないと回答した。

必要と回答した理由としては、「もうあんな痛み嫌だと思っていたが、助産師さんと話していて、
赤ちゃんが生まれてきた喜びのほうが大きくなった」、「産んでそのままというのはとても切ない
と思うので、とても重要だと思う」、「出産から育児へ気持ちを切り替え、新しい生活への第一歩を踏
み出さないといけない時期なので、そこで立ち止まらなくてもいいような援助になると思う」、「振
り返りで面談をしなかったら、こんなに前向きな気持ちにはなれなかった」、「助産師さんと自分の
気持ちを共有してもらうことで、感動や大変だったことを落ち着いた状態で再認識できるから」、
「色々話すことができるので」と記述し、“児の誕生の喜びの増大”、“育児への気持ちの切り替えの
助けとなる”、“前向きな気持ちになる”、“感動や苦労を共有し、再確認できる”などが理由として
読み取れる。

面談を必要としないと回答した理由は、無記入であり、今回内容は不明であった。

4) 面談後、育児に対する気持ちや意欲の変化について

1名は「なし」、6名は「あり」と回答。「あり」と回答した産婦は具体的には、“お産も育児もみ

んな同じように大変なので、自分だけがとか考えないようにと思った”、“自信を持っていいんだと自分で思えるようになった”、“元気に生まれてきた子と、それを取り巻く家族と楽しく生活していこうと思うようになった”、“母乳をあげるのが少し辛いのですが、ゆっくりやっていけば、気長にやっていけばいいと思えるようになった。お産をあんなに2人で頑張ったのだから、これからも頑張れると思えるようになった”、“赤ちゃんは一人ひとり違っていいのだと改めて思った。赤ちゃんのペースにあわせて、ゆっくり育児に取り組みたいと思う”と記述し、面談後、育児への前向きな気持ちの変化がうかがわれている。

3. 面談導入による助産師への効果

アンケート調査は、当科病棟で分娩介助に携わっている助産師に実施し、18名に配布し15名から回答が得られた。その内分けは助産師経験年数1年目4名、2年目2名、3年目3名、4年目2名、5年目以上4名であった。以下にアンケート結果についてまとめた。

1) 面談時の配慮

面談に際して、助産師は次のことを配慮して関わっていた。場所や時間帯の選択などといった「環境」、産婦が自分から話す言葉を大切にするなど「受容的な傾聴、産婦の言葉を引き出す、否定しない姿勢」、分娩時の産婦や家族の頑張りをほめるといった「労いの言葉がけ」などを配慮していた。

2) 面談を導入しての助産師の感想及び気付き

面談を実施して助産師が感じた内容として次の項目が抽出された。

プラス面（良かった点）としては、次の4項目が抽出された。「バースレビュー用紙に書いていない内容も聴ける、産婦の率直な意見が聞ける」など“産婦の率直な言葉、微妙な心の内を聴き取ることができる”。「面談をすることで、自分の産婦への関わりがどうであったか考える機会になり、看護の質の向上につながるのではないかなと思う」など“自分のケアの振り返り”。「産婦から良い言葉をかけてもらい、逆に自分が励まされ、感動した」など“前向きな気持ちになった”。「バースレビュー用紙記入内容にマイナスのことが書かれていたが、面談中に産婦から前向きな言葉が聞かれてうれしかった」など“産婦の前向きな気持ちの変化を実感できた”。今回のアンケートからはこのような言葉が助産師から聞かれた。

マイナス面（困難、大変と思った点）としては、次の3項目が抽出された。「勤務の都合上面談が時間外になることが多い」など“面談時間の工面”、「バースレビュー用紙に後ろ向きの内容が書かれているときの対応に戸惑う」など“産婦の言葉への対応への難しさ”。助産師はバースレビューの面談を実施するにあたり、このような難しさを感じていることがわかった。

V. 考察

バースレビュー用紙には産婦の率直な意見や感想が記載されていた。その中で、分娩時のわだかまりに関しても様々な要因があることを改めて読み取ることができた。今回明らかになった要因を、助産師が把握し、日々の助産業務の中で意識して産婦と関わることで、今後の助産ケアを充実させていくために有効な手がかりとなると考える。

また、産婦は分娩担当助産師との面談を必要としていることがわかった。面談を実施して、産婦からは肯定的な言葉が多く表出され、育児への意欲、スムーズな移行の助けとなることがうかがわれた。和田らは、期待通りにお産が進まなかったとしても、あるいは難産だったとしても、産婦自身がその体験に意味を見出すことができれば、肯定的感情を持ってお産を受けとめ、このような母親は育児にも容易に適応できる¹⁾、と述べている。産後鬱や虐待などが問題視される今日、ゆっくり産婦の声に耳を傾ける面談を取り入れたバースレビューは、それらを予防する有効なケアとなりうると考える。

出産のプロセスを振り返ることはいずれの母親に対しても、積極的な自己概念の保持ないし回復を助け、母親としての能力を遂行する能力を助けると言われている²⁾が、今回、面談を導入して、面談後の産婦の前向きなきもちの変化を読み取ることができ、バースレビューによる肯定的な自己概念の再構築及び育児への効果を感じることができた。

助産師は、バースレビューの面談により、自分のケアを振り返り、産婦の言葉を受け、助産ケアへの意欲の向上を見出しており、助産師にとっても有効である。しかし一方で、日々の忙しい業務の中で、ゆっくり面談の時間を工面することの難しさや労力、産婦の否定的感情への対応への戸惑い、戸惑いも混在し、助産師の心理的な葛藤にも今後目を向けていく必要がある。

最後に今後の課題として、当科における対象の特徴を考慮し、NICU入院児の母親や死産、新生児死亡など特殊な出産を体験した症例などに対しても、今後バースレビュー方法の模索、検討を進め、産後の精神的なケアの更なる充実を図っていく必要があると感じた。

VI. 結論

1. 産婦は出産時、様々なわだかまりを抱えている。
2. 面談は、産婦が出産を肯定的に捉えなおし、母親役割行動を遂行する助けとなる。
3. 助産師は、面談により産婦の反応を間近に受け、前向きな心理になる。一方で、産婦の否定的感情への戸惑い、時間の工面などの課題もある。

【引用文献】

- 1) 和田サヨ子、新道幸恵：周産期の母子の看護 心理社会的アプローチ 出産のプロセスを振り返る - 母親役割適応への援助 - , 助産師雑誌 40 (9) : P95～99, 1986.

【参考文献】

- 1) 東野妙子ほか：特集 バースレビュー徹底研究 ペリネイタルケア Vol25, No8, P9～38, 2006